

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號 第 四 十 五 卷

昭和二十二年八月一日發行

論 叢

營業稅の課稅標準と賣上稅の課稅方法……………法學博士 神戸正雄
井田制と其社會的意義……………法學博士 財部靜治
國民共同體の人間學的基礎……………經濟學博士 石川興二

時 論

輸入統制としての「Jaski」制度……………經濟學博士 谷口吉彥

研 究

純損益概念するに關する若干の基本問題について……………經濟學士 熊本吉郎
工業經營規模の双峯分布について……………經濟學士 田 杉 競
職業の意義と問題……………經濟學士 澤崎堅造
資本移動の近代理論……………經濟學士 松 井 清

說 苑

カレッキの數學的動態理論……………經濟學士 青山秀夫
複式簿記法の發生……………經濟學士 岡本愛次

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

職業の意義と問題

——特にマックス・ウェーバーについて——

澤 崎 堅 造

目 次

- (一) 職業の意義に關する問題
 - (1) 産業と職業
 - (2) 經濟的と倫理的
- (二) マックス・ウェーバーの Beruf について
 - (1) 「職業としての學問」、「職業としての政治」
 - (2) 「新敎倫理と資本主義精神」
 - (三) 職業の意義の變遷——職分、天職、生計、企業

一

職業の意義に關してツアーンが述べてゐるところは大體に於て最近の考へ方をよく云ひ現はしてゐるものと思ふ。即ち、職業には二種の意味があつて、その一つは「國民經濟的見地」からして「人々の勞働分科の歸屬性である」とするが、他方には「個人的要素」の點からして自己利益を増進し、家計目的に奉仕するものとして出ると¹⁾。前者は統體の立場を執つたのであり、後者は個體の立場を執つたのである。そして更に前者は人的態様を示したのであり、従て倫理的關係を示すのであるが、後者はこれに對して生活資料の獲得といふ經濟的關係を主として示したものである。かくて此のツアーンの定義からして我々は統體のか個體のかと云ふ見方と、倫理的か經濟的かと云ふ見方とからして二様の問題が提出されることを知るのである。

1) Friedrich Zahn: Handwörterbuch der Staatswissenschaften II, S. 59 f.

(1) 統體的と個體的(又は産業と職業)——職業をば統體的か個體的かといふ點から見るといふことは、換言すれば社會の量的な構成から見ることとも云へる。より具體的に云へば、例へば職業統計に於て最近喧しく問題になつてゐる「産業」か「職業」かと云ふ問題に關聯してゐることである。即ち人口の分類について、性別、年齢別に次いで重要な職業別の方法に關して近時大いに問題となつたことである。この「職業分類」と云ふのは個人の技能を中心としたものであつて、從來多く用ひられたものであるが、極く最近になつて更にこの外に「産業分類」なるものが重んぜられるやうになつて來た。これは即ち各人が歸屬するところの産業の種類によつて分類しようとするのである。従てこれは個人よりも、それが據るところの統體の部分としての意義を示すものである。我が國に於ても大正九年の第一回國勢調査は、主として前者の所謂「職業分類」によつたのであるが、昭和五年の際のは後者の所謂「産業分類」によつたのである——即ち「主たる職業とは、主として一身を委ねるものを云ふ」となし、「その區別をなし難きときは收入の最も多いものを以てそれとなす」と。か様にして職業についても、個人的な立場から統體的な立場へ移り替りつゝあるといふことは、我國に於てのみならず、最近の世界の傾向である。何となれば、かゝる統體的立場を明かに執る様になつたのは一九二三年の國際勞働統計會議に於て産業及職業分類に關する討議及び決議が行はれた結果に基くこと大であるからである。この席上なほ多くの議論が行はれたのであつたが、即ち職業をば個人的立場から認めやうとする説も多く行はれたのであるが、併し結局大體に於て團體主義的な産業分類を採るべしとする議論が勝つて、「凡そ經濟生活に於ける根本要素は、個人に非ずして企業、事業體又は工場である。従て一國の經濟組織を示す分類は個人よりも大なる單位、即ち生産・分配・用務等の目的を果す

専門的單位と見なされたる企業なり工場なりを以て基本單位としなければならぬ¹⁾となし、遂に「有業者は先づ第一に各自の従事する産業によりて分類すべし、而して各産業の内部に於て更に有業者を個人職業によりて分類するも可なり²⁾」と決議したのであつた。これを以ても、社會形態の力點の在り方によつて個體的か統體的かといふことになり、職業の考へもまた「職業」となり、或は「産業」となるといふこと、そして最近の傾向は益々統體的な方向へ、即ち「産業」的な方向へと向ひつゝあると云ふことが出来る。

(2) 經濟的と倫理的——職業をば更に、社會の質的な作用から區別して見るならば、經濟的か倫理的かと云ふ問題が生じて來るのである。職業といへば普通は大體に純經濟的なものを指すと見られてゐるが、なほこれを廣く社會的關係であると見るもの、或ひは進んで倫理的・宗教的意義をも持つべしとするものもある。蓋し先きにも述べた様に、職業をば個體的に見る場合でも、それを個人の生計とのみ見る以外に、技能といふものを重視するものもあり、統體的に見る場合には一層身分的な關係を強調するのであるからして、そこには自ら經濟的なもの以外に倫理的、宗教的なものが重要視されなければならないのは當然である。即ち社會構成をば質的に作用的に見た場合には、外的と内的とに、物的と心的とに、或は客觀的と主觀的とに區別することが出来るとすれば、それに従つて職業の意義も亦自ら異つたものが出て來るわけである。

經濟學者や統計學者は、多く純經濟的なものを以て職業の意義なりとする。例へば曰く「業務に對する熱心の程度又は技巧の程度を考慮せずして、専ら其の業務が利得を伴ふものであるか否か、換言すれば經濟的活動であるか否かを基準とする³⁾」と。これは併し統計の技術的立場から便宜的に設定したものであつて、職業の本質を全

1) 内閣統計局編「産業及職業分類の方法」七八頁

2) 同上、九三頁

3) 岡崎文規博士著「職業統計問題研究」六二頁

面的に考察するには不十分であること云ふまでもない。そこで更に倫理的な意義を以て、職業の眞意を明かにするものであるとなすものがある。例へば曰く「持續して遂行し、あらゆる計劃と努力とを以て従事する勞働はその勞働に對する行爲者の精神的、道德的關係によつて初めて職業となる」、或は「勞働が生計と慰樂とに役立ち得る貨幣或は貨幣價値の獲得の手段のみを目的とする場合には、この勞働は單なる利得又は勞務に過ぎない。併し人間がこの勞働を道德的行爲にまで高める場合、初めてそれは職業となる¹⁾」と。前者の經濟的な云ひ方を以てすれば、職業とは即ち所得を賣すものと云ひ換へることが出來よう。そして後者の倫理的、宗教的な見方からすれば、天職又は召命といふことが出來るであらう。そして此の兩者の意義も、極く最近は後者の倫理的な意義の方がより強調されるやうになつて來たと云ふことが出來る。これは即ち先きに示した産業と職業とに於て統體的にして身分的な「産業」の方がより強調されて來たと云ふのと、相關聯することである。従て最近に於ては、經濟的な見方以外に倫理的な或は宗教的な意味をも十分に加味しなければならぬと云ふやうになつて來たと云ふことが出來よう。

以上によつて職業の意義に關して最近問題となつた二つの問題——産業と職業(統體的と個體的)及び經濟的と倫理的——を採り上げたのであるが、そこからして我々はそれらを更に組合せることによつて職業に關して四つの意義の存在を見出すことが出來る——個體的と經濟的とからは「生計」を、統體的と經濟的とからは「企業」を、個體的と倫理的とからは「天職」を、そして統體的と倫理的とからは「職分」といふ工合に、しかしこれら四つの各自の意義や相互の關聯については、更に後に述べることにする。

1) 同上、六五頁參照

II

職業の意義に關する問題を取扱ふためには、一應マックス・ウェーバーの *Beruf* に關する考へと、それに関する諸批評について幾分かの考察を経なければならぬ。蓋し「職業」の意義に關し、特にそれが業務的意義と資本主義精神との關聯の問題を提起したといふ意味で、今なほ彼の影響するところ大であるからである。それが特に有名になつたのは、一九〇五年に公表された彼の「新教倫理と資本主義精神」¹⁾に於て、ルーテルの *Beruf* に關する考へが宗教的なるものと世俗的なるものとの結合點を作り、なほカルヴィニズムの現世的禁欲主義 (*die innerweltliche Askese*)²⁾ が世俗的職業への是認・精進の途を備へたと云ふことが、資本主義の指導原理を發成し育成するに預つて力があつたといふことを提示したとして知られてゐる。そしてこれに對しては種々なる意見、批判がなされ、いまなほ經濟・發展せられてゐることは人の知るところである。⁴⁾ けれども、そこで主として問題となつてゐるのは、直接に *Beruf* そのものゝ意義に關してではなくて、それが經濟社會へ如何に關聯したかといふ點についてである。ここでは資本主義との關聯の問題を取扱ふことは當面の問題ではないので、それについて述べることは止め、ウェーバー自身が *Beruf* について如何に考へたのであらうかといふことを問題としたいと思ふのである。そして、それが爲めには右に掲げた著書を参照することは勿論であるが、なほそれ以外にも彼の *Beruf* 觀を示すものとして「職業としての學問」と「職業としての政治」との二文獻についても述べて見たいと思ふ。

(1)「職業としての學問」⁵⁾、「職業としての政治」⁶⁾——この二つは何れも彼が一九一九年にミュンヘン大學に招かれてなした三つの講演の中の二つであるが、これは正に歐洲大戰の終熄した狂瀾怒濤の時代であり、彼自身にとつ

1) Max Weber: Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, G. A.R. I. 1922, S. 17-206.

2) a. a. O. S. 84 f.

3) 主たる批評は、E. Troeltsch: Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen 1911. W. Sombart: Der Bourgeois 1913. L. Brentano: Die Anfänge des modernen Kapitalismus 1916. H. Pesch: Lehrbuch der Nationalökonomie

でもその生涯の幕を閉づる前年であつたと云ふことを思ふとき、この Benin に關する問題が如何に重要な意義を持つたものであるかといふことが知られよう。

彼はこの前著に於て、學問の獨立性と學者の職分とについて述べんとしたのであるが、彼はまづ卑近な例をとることから初めてゐる。¹⁾ 即ち大學の職員について少しく考察して見るに、普通獨逸の大學に於ては、先づ初めに私講師と云ふものになる。これは一定の俸給はなく、聽講料を以てその報酬とする制度である。従て講義の故に比較的研究の自由は得るけれども、その収入は初めは極めて僅少である。またその地位についても、極めて不安定であると云はなければならない。將來助教授、教授に必ずしも當然に昇進するものとは限らない。昇進の望みは、まことに僥倖にしか得られない。これがその實情である。これに對して亞米利加の大學に於ては、まづ初めに助手と云ふものになる。これは教授の研究、授業の補助をなすのであるが、従て一定の俸給と身分の安定とを持つ。併し自己の研究に専心没頭すると云ふわけには行かない。この兩者の制度を比較して見るに、獨逸の私講師は外的には収入は僅少、地位は不安定といふ悪い條件ではあるが、併し內的には學問に専心没頭し、學問の職分を果すに適してゐると云はなければならないが、それに對して亞米利加の助手は、自己の研究に専心いそむと云ふことは幾分出來難いが、外的諸條件には比較的に恵れてゐるが故に、落着いて將來への準備をなすことが出来る。とは云へ實際には兩者とも夫々官權・金權の壓迫によつて災ひされてゐると述べてゐる。そして更に「職業としての政治」に於ても、殆んど同様なことが述べられてゐる。²⁾ 即ち政治といふものの擔當者に二つある。官吏と政黨員との二種である。前者は概して身分が保障され一定の俸給が與へられてゐる。従て利害勢力に牽聯さ

II 1920.

- 4) 最近に於ける主たる論著は、R. H. Tawney: Religion and the Rise of Capitalism 1926. G. Wünsch: Evangelischen Wirtschaftsethik 1927. J. B. Kraus: Scholastik, Puritanismus und Kapitalismus 1930. H. M. Robertson: Aspects of the Rise of Economic Individualism 1933. J. Brodrick: The Economic Morals of the Jesuits 1934. A. Fanfani: Catholicism, Protestantism

れずに正當なる政治に携はるべきである。けれども實際には官吏は多く所謂俗吏根性を出して卑屈となり、清新潑刺たる政治の運用を爲し難い。これに反して政黨員は、自ら進んで政治に參與せんとするのであるから、比較的に熱意を持ち、官吏の俗吏根性とは違つて活潑になり得るといふ便宜もあらうけれども、何分にも多くは名譽職の故に収入は僅少であり、地位は極めて不安定である。それがため實際には却つて利害に引き廻されて醜惡なる結果を曝すことが多い。かくの如くしてウェーバーは、職業の問題についてまづ如何に外的なる諸條件が力強い關係を持つてゐるものであるかといふことを述べる。如何に人々が内的召命を得て天職に没頭しようとしても、多くは此の外的なる諸條件即ち生計と地位との問題にぶつかつてしまふかと云ふことを述べたのである。彼はそこで皮肉にも、大學に残つて學問の途に志を致さんとする青年に對して云ふ「君は凡庸な連中が年一年と君を越して昇進して行くのを見ても、腹も立てず氣も腐らさずにゐられると思ひますか、と云ふ風に念を押し置てかなければならない。ところが斯うした人達から受取る答はきまつて斯うである。勿論です、私はたゞ私の天職に生きるのみですと。だが少くとも私の経験では、斯うした人達が精神的に打撃を受けることなく、その生活に堪へ得た例しは極めて少い」と。

此の如きウェーバーの警告に注意されつゝ我々は更に進んで、愈々彼の内的意義に這入らふと思ふ。そこではまづ彼は職業をば天職であるとしなければならぬと解く。天職と云ふのは何か。自己の地位が業が、天より召命として與へられ、備へられたものであるとすることである。「天賦」といふことについて彼は極めて興味深い論述をなしてゐる。「職業としての學問」に於ては、學問をなすものゝ天賦とは何かと云ふに、三つあるとする。即

and Capitalism 1935.

- 5) Wissenschaft als Beruf, 1919. 尾高邦雄氏譯「職業としての學問」參照。尙、この「Beruf」の意義は單に「職業」と譯しては誤り易いので、尾高氏譯に於ても「職業」(23, 64頁)、「職分」(36, 60, 63頁)、「天職」(44, 63頁)、或は「心構」(23頁)等と譯し分けられてゐる。
- 6) Politik als Beruf, 1926.

ち第一には熱情である。自己の立場に、自己の研究に全生命を賭けてなすところの、死して悔いないところの學問への熱情である。これは單なる努力ではない、天より備へられたる天賦の一つである。第二は靈感である。思ひ付きである。如何に熱情を持ち、懸命なる努力を試みたところで、靈感による閃きがなければ途は開けない。靜かに待つ心にそれは来る。それは意外なとき、意外な處に來る。坂路を登りつゝあるときなどに來ることもある。併しこの二つだけでは足りない。第三に合理性がなければならぬ。學問をするものとして、これは當然である。これらのことは亦「職業としての政治」に於ても大體云はれてゐるところで、政治に携はるもの、「天賦」とは何かと云ふに、これにも亦三つある。その第一は同じく熱情である。第二には、學者の場合とは少し異つて責任感である。爲すべき行爲の結果に對して自ら責任を負はんとすることである。決斷である。そして第三には豫測、見通しである。これは學者の場合の合理性と同じである。冷靜なる判斷に基いた適確な豫測、これらが無ければ眞の政治家となることは出來ないと。

職業の内的意義の第一として天賦又は天賦といふことについて述べたのであるが、更にそれらは單に個人の主觀的意義に留るべきではない。即ちかゝる職業の内的意義も亦、他に對し、全體に對し如何なる職分を持つべきかといふ、職分の意義が問題とならなければならない。例へば學問は社會全體に對して事理の明瞭を計らんとする職分を持つが故に、これに携はる學者も亦かゝる職分に對する責任を全體に對して擔ふべきであり、政治はまた本來秩序を保つために不正と無秩序に抗し、眞實性を確保する義務がある、けれども亦それだけその結果に對する責任を重んずべきである。從て政治に携はるものは、何よりもよくこの政治の職分に妥當しなければならぬ

- 1) Wissenschaft als Beruf, 1919, S. 1 f.
- 2) Politik als Beruf, 1926, S. 15 f.
- 1) Wissenschaft als Beruf, S. 9. 邦譯二三頁參照
- 2) a. a. O. S. 12. 邦譯二九頁
- 1) a. a. O. S. 10.
- 2) a. a. O. S. 10.

いのである。此の様に於てウェーバーの解くところは、職業には大體二つの方面から考へられる。一つには外的に、他には内的に、前者については更に生計と地位とに、後者については天賦と職分とに分けられる。要するにウェーバーも亦、職業の意義については大體四種類に分けられると考へる。生計と地位と、天職と職分とに。

(2)「新教倫理と資本主義精神」——これは前二者よりはずつと早く公表されたものであつて、この中には「ルターの職業観」と題する章さへあり、併せてカルヴィニズム及び新教諸派の職業観を主として問題としたのである。従て直接にはウェーバー自身の職業観を明かにするためのものではないが、併しそこには自らに彼の考へを現はしてゐる。まづ彼は所謂「資本主義精神」なるものについて述べる。これは即ち資本主義の指導原理とも云ふべきものであるが、その原理として特性を示したものは何かと云ふに、大體個性、自由を尊重し、労働を重んじ、特に營利を是認し追求せしむるところにあつた。かゝる特質を有する資本主義精神について、ゾンバルトの云ふところを援用すると、これは大體二種の「精神」から成つてゐる。一つは所謂市民精神であり、他は企業精神である。前者は大體に於て保守的な傾向を帯びたもので、慎しみ深く、自制的であり、従て節儉を重んずると云ふ風がある。例へばフランクリンその他の道徳を見ればよくわかる。次に企業精神はそれに反して大體に於て進歩的にして、冒險を好むと云ふ風がある。従て前者の市民精神からは、保守的な自制と節儉との故に自家の生計と云ふことが最大の關心となるに對し、後者の企業精神からは進歩的な活動と冒險との故に、企業への關心が進展せしめられたと見ることも出来よう。かくて近世の資本主義社會の指導的精神は、實はこの矛盾した二種の方向を持つたもの、統一であるといふことがわかる。従て全體としては資本主義社會特有の經濟的關心の増大といふこ

3) a. a. O. S. 11.

4) a. a. O. S. 15 f.

5) Politik als Beruf, 1926, S. 51 f.

6) Wissenschaft als Beruf, S. 30 f.

7) Politik als Beruf, S. 56 f.

1) „Luthers Berufskonzeption“, G.A.R. I, S. 63-83.

との中に、個的には生計を、社會的には企業をと云ふ風になつたと見ることが出来る。

更に新教倫理について述べるに、これはまづ大體二つに分けられる。即ち初めにはルーテルの考へや影響であり¹⁾後にはカルヴィニズムのそれである。²⁾まづルーテルの考への特徴が、信仰・自由・個性等を重んじて大體に於て内的傾向が強いといふ點にあるのであるが、職業觀についてもよくそれを示してゐる。即ち人々が眞に救済されるのは、特別に差別されたる身分や、業等によつてなされるのではなく、全く啓示に對する信仰によるのみである。従て從來はより、潔められたる生活として僧侶の身分になるといふことが、特に選ばれたるものといふ意味となり、これが召命(vocatio)といふことであつた。ところがルーテルはそれに反對して、「選ばれる」といふこと、神の召命を受けるといふことは、何も特別な身分になるといふことではない。特に引き抜かれるといふのではない。選ばれ、召命を受けるといふことも、「その場處に於て」である。即ち與へられ、備へられた處、身分、地位にあつて、與へられたる業に於て、あり得るものとした。³⁾故に所謂世俗的職業といふものが極めて高い價值があるものと云ふことになつた。彼が從來宗教的にのみ、而も僧侶的にのみ用ひられてゐた召命といふ意味の„Beruf“をば、世俗的職業をも同時に意味する様になしたのである。少くとも明確にかゝることを云ひ、且つ大いなる影響を與へたといふのは彼である。⁴⁾これ彼の職業觀の重要な所以である。要之、ルーテルは Beruf の概念をば世俗的職業をも示すに用ひしめたと云ふことが、彼をして職業をば天職なりとせしめた所以である。

次にカルヴィニズムの考へに於ては、ルーテルの影響を受けたものには違ひないが、強いて差異を述べると、これは大體に於て外的なる傾向を帶びる。人が救はるゝのは信仰によること勿論であるが、恩寵に對する責任と

- 2) Der „Geist“ des Kapitalismus, a. a. O. S. 30-62.
- 3) W. Sombart: Der Bourgeois 1913, S. 29 ff.
- 1) M. Weber: G.A.R. I, S. 63-83.
- 2) „Die Berufsethik des asketischen Protestantismus“, a. a. O. S. 84-206.
- 3) M. Weber: a. a. O. S. 75.
- Karl Holl: Die Geschichte des Worts Beruf, G.A.K. III, S. 215.

いふ點及び信仰の確さといふ點が強調されるのである。従て靜寂主義ではなくて、概して活動主義である。行爲や方法、態度にも可成りの重要性を持たしめる。制度や義務に對しても關心を持たしめ、全體として勤勉を要求する。それは要するに「神の榮光のために」といふ自己の職分を果すと云ふことなだけである。各自の働きが、そのまゝ神の業の全體の一部をなすといふのである。カルヴィニズムが勤勉・節儉を重んずるために特に禁欲主義を採る。殊に有名なる現世的禁欲主義とて、中世の隱遁的な修道院的禁欲主義ではなくして、現世の、世俗の業務の只中に、活動の中に禁欲・節儉・勤勉たらんとする。この精神の影響が極めて大なるものがあると思はれてゐる。

要するに、新教倫理が如何に近世の職業觀に對して影響を與へたかと云ふに、ルーテルからはその Beruf 觀に於て個的・內的なる點が強調され、正に天職を主張されたのであり、カルヴィニズムからはその社會的・行爲的な點が強調されて職分の考へに近いものを提供されたといふことを知つた。仍ち、先きに示したる資本主義精神については、市民精神と企業精神とから生計と企業との考へが出て來たことを示し、今また新教倫理からはルーテルより天職とカルヴィニズムより職分に近い考へを取り出すことが出來た。これ必ずしも牽強附會ではないと思ふが、先きに示したるウェーバーの職業觀の四つの種類に自ら符合するのを見るのである。そして「新教倫理と資本主義精神」といふのは、要之、これら四種の意義の相互の關係を問題としたのであるとも云ふことが出来るであらう。

三

- 4) この思想は既に Tauler や Eckhart に現はれたが、明かに世俗的職業を指して „Beruf” なる言葉を使用したのは、ルーテルが聖書翻譯に於て用ひたのを以て初めとする。M. Weber: G.A.R. I, S. 66. H. Pesch: Lehrbuch der Nationalökonomie II, 1920, S. 658. 参照

以上によつて職業の意義について、現代特に問題となつてゐるもの、及びマックス・ウェーバーの職業觀なるものを概略窺つて見たのであるが、そこに於て我々は職業の意義について、大體四つの考へ方があることを學んだ。まづ外的な方向に於ては、第一に生計を、第二に企業を。それから内的な方向では、第一に天職を、第二には職分を。以上四つの種類があることを述べた。そこで更に、これら四つの職業の意義について、更に歴史の上で如何に變遷されたかと云ふ點を見て見たい。即ち職業の意義を動的に考察して見たいと思ふのである。

職業の意義について歴史的に考察するに當つて、それを極く古いヘブライやギリシャの時代から變遷の跡をたどると云ふことは極めて興味深い。また有意義なことと思ふが、それは別の機會に譲り、いまは單に中世と近世とについて概略述べて見たい。先づ中世の封建社會は、その社會構造に於て、權力的・統一的な秩序の下にあつたと云はれるが、これに對して近世の市民社會は、營利的な各個的な傾向に立つてゐると云ふことが出來よう。凡て社會の構成については、これを制度的・量的な方面から觀察すれば、統體を中心とするか、個體を中心とするかで、統體的と個體的との區別が出來ようと思ふ。これは或は量的な區別の標準とも云へようが、これに對して寧ろ質的な區別を立てるとすれば、心的か物的かによつて、主觀的か客觀的か又は內的か外的か、或は倫理的か經濟的かともなると云へよう。そしてこれは社會の作用について述べることである。かゝる社會構成についての二様の標準を以て、中世と近世とを比較して見ると、云ふまでもなく中世封建社會は、大體に於て制度的には統體的であり、作用的には倫理的であり、近世市民社會は制度的には個體的であり、作用的には經濟的であると云へよう。そこで今これらの時代的特性とそれらの職業觀の特徴とを關聯して考へて見ると、まづ中世封建社會

の最も典型的なものとして十三世紀頃(例へばトマス・アキナス)の考へを見れば、自ら統體的・倫理的である。これは即ち職分の考へを最もよく代表する。次に中世末期、近世初頭の十六世紀(例へばルーテル)に於ては個體的・倫理的である故に、自ら天職の考へである。第三にその宗教改革の後期即ち近世的色彩が充分濃くなつた十七世紀(例へばバックスター)には個體的・経済的といふことが出来よう。從て自ら生計の考へに近くなる。更に近世市民社會の典型期としての十九世紀には統體的・経済的である。從て職業も亦統體的となり、企業又は企業態或ひは階級とも云はるべきものとなつた。

要之、中世の頂上から近世の頂上までの一波長とも云ふべき期間の四つの顯著なる時點を採つて、そこに色々の職業についての考へ方を示すと、職分——天職——生計——企業の四つの順序に並べられるのを見るであらう。而も我々は極く最近に於て、世界大戰後の時代的變動期に這入つて、統體的・倫理的傾向が強まり、單なる企業といふ如き経済的・統體的なものから進んで倫理的なものを採り入れる傾向になつたといふことが出来よう。これは取りも直さず「職分」の考へに再び近づき戻つて來たとも云へる。勿論この職分は、中世のそれと全く同じである筈はないが、大體に於てその方向にあると云へる。シュパンの職分協同體の考への如きは正にそれである。更に同じ流れを汲むダウンクマンに至つては、進んで個體的特性としての天賦を重んじ、それを見出し、養成せしむるに當つての實際政策を掲げてさへゐるのである。かゝる情勢を靜かに眺めて見るならば、我々はどうしても中世末期、宗教改革初期に現れたる時代的變動期の諸情勢を思ひ出さざるを得ない。そして同時に職分と天職といふ、統體的・倫理的な職業觀が今また強く要求されて來たのを見るのである。(了)

1) Othmar Spann: Der wahre Staat 1923, S. 268 f.

2) Karl Dunkmann: Die Lehre vom Beruf 1921, S. 173 ff.

3) 最近に於ける神學的解釋については、特に、Georg Wünsch: Evangelische Wirtschaftsethik 1927, S. 566 ff. Emil Brunner: Das Gebot und die Ordnungen 1932, S. 182 ff. 参照